

ティーチインの後は、場所を移して地元のジャーナリストとの交流会でした。食べ放題、飲み放題に気を取られ、食事がメインとなりました。日本人は社交が苦手、ましてや、気心の知れた人と一緒に座れば、「村社会」的交流で終わりになります。少し残念でしたが、私たちも過密なスケジュールをこなした2日目の晩でしたから、一息ついたということでしょうか。

平和の旅の最後の日には、8時から、現地のガイド横田真理子氏の案内による見学がありました。沖縄戦での首里防衛線の**激戦地シュガーローフ**はホテルのすぐ近くの丘でした。シュガーローフに上ると、慶良間諸島の島影が見えました。陥落するために7日間要したそうで、日米双方に甚大な被害が出ました。その後雨が続きましたが、6月23日首里が陥落し、最高司令官である牛島中将が自決。ところが最後の命令が「最後の兵まで戦え」という降伏を許さないものであり、指揮系統は崩壊してしまっただけで、沖縄の被害は熾烈を極めてしまったのです。無責任の極致です。



続いて、首里城の南西にある**識名壕**(しきなごう)を見学しました。今は、住宅が密集しています。天然の鍾乳洞の壕で住民が防空壕として利用していたのですが、住民は追い出され、野戦病院の分院壕として接收され、5月末まで利用されました。当時女学生で、看護活動をしていた稲福マサさんは、ここから撤退し、運よく助かったのです。兵隊の怪我の手当、最後には死の処置、または放置した事、親

友の爆死など、彼女の証言により、沖縄戦の悲惨な事実が明らかになっています。壕は真っ暗で足元もゴツゴツしていましたので、よくぞ、病院壕となったものだと、驚かずにいられません。ガイドの横田氏はマサさんと直接出会って、お話を聞いておられました。彼女は一人ひとりに生活があったという視点から、犠牲となった方々に寄り添った説明をされました。

最後の見学地は糸満市摩文仁の丘にある「**平和の礎**(いしじ)」でした。すぐ目についたものは祈念資料館の入口の反対側にある韓国人慰霊塔でした。石をはめ込んだ巨大な円形です。一万余名が強制的に動員され、艱難を強いられ、戦死し、虐殺されたと記されています。祖国に帰り得ざるこれらの「冤魂」という言葉が心に残りました。「怨恨」をも含んでいるでしょう。「怨」は朝鮮人の深い心情を表す言葉です。犠牲となった方々に対し、謝罪の思いは未来永劫に持ち続けたいし、平和につながる和解の手段はどんなに小さくても実行したいと願って、この慰霊塔の前で祈りました。



礎は太平洋に向かって、波が押し寄せるように波状に並び、沖縄戦で命を落とした軍人、沖縄の民間人、外国人24万人余が記名されています。私たちのグループの若い研究者の女性が、朝鮮、韓国人の刻銘碑の前で、涙をためた目を閉じて、黙禱をささげていました。また、北海道出身の軍人が非常に多かったです。9条の会の仲間の孝子さんが2歳上の従兄の名前を見つけました。胸が一杯になったことでしょう。千の風が吹いていました。摩文仁の断崖に寄せる波は美しかったです。私は「沖縄平和の旅」に参加し、沖縄の民意を聞き、基地を撤廃してほしい思いがますます募りました。

